

十七文字の抒情詩 ゆうじ

桜の花も散りすっかり葉桜に…何もかもが生き生きとした気持ちの良い季節です。

前号に間に合わなかったうさおさんの句今回に入れさせていただきました。うさおさん、日出彦さん、健さん、投句ありがとうございました。

うさおさん、柴犬の「犬川柳」は面白かったですか？うさおさんの句はユニークです。俳句にも川柳のような軽さやユニークさが必要だと常日頃思っています。これからも伝統俳句の良さを入れながら、面白い句を詠んでいただきたいと思います。

うさお

花粉舞う野に我は一人いて

* 花粉舞う野にひとりいて夕暮れる

最近では花粉も春の季語になっている歳時記もあるようですが、花衫という春の季語もあるので、この季語で文語体にするのなら

* 花衫や野にひとりゐて夕暮るる

* いつまでも手離せぬマスク煩わし

* いつまでも離せぬマスク煩わし 　　てばなせぬマスク…では中人になってしまうので…

寒暖の差は目と鼻が先になり

* 温度差が目と鼻にきて日永かな

花粉症かなりひどいのでしょうか？私も花粉症歴は長いのですが、「コウズ」を飲み始めて少しはよくなりましたよ。

菜の花の畑野で犬は惑いけり

* 菜の花の畑野に犬は惑いけり

後足で耳搔く犬は暖かし

* あたかや耳搔く犬の足忙し 　　暖かで切れ字を使う事によって俳句に深みが生まれます。

蒼空にこぶしの花と霊柩車

青空、辛夷、霊柩車…面白い組み合わせですね。ただ、よりストーリー性を持たせるのなら

辛夷咲くぐると廻り霊柩車 　　こうすると、何となくストーリーが生まれそうです。

すかんぼも土筆も生える軌道敷き

すかんぼも土筆も同じ線路に生えているのですね、私なら、*廃線のすかんぼ土筆いぬふぐり 草花が生えるのはわかっているのです、この生えるというのは省きたいのです。少し意味合いが違うかもわかりませんが、それに三つも季語があつては本当はいけないのでしようが、でも、線路(廃線の方があいそうです)に色々な草花が春になっていっせいに生えてきたって事を言いたいので。

水温む鴨が遊ぶか入江川

春らしく長閑な感じが出ていて良いのですが、残念ながら水温む(春)鴨(冬)で季重なりです。 *鳥遊ぶ麗らかな日や入江川

花衣渠に鶴鴿うなづきし

こちらも、花衣(春) 鶴鴿(秋)の季重なりです。

鶴鴿を別名の石たたきにして、群れはなれ渠に頷く石たたき 秋の句になってしまいましたが、同じ句に違う季節の季語はやっぱり無理があるので。花衣を生かしてもいいのですが、良い句がうかばなくて、ごめんなさい。

川面まで花重たげにしな垂れり

* 川面にも姿映せし枝垂れ花

目に錐を刺されるような花粉症

うくん、むずかしいです。目に錐を刺す痛みかな花粉症

聞いて触れ五感の内の二感のみ

* 二感のみ働く春の風邪なれば

犬は犬人は人なり花の下

この句はいいですね、何か悟りを感じます。面白いと思います。

日出彦さんもお上手ですね。パリと知多半島にてとありました。旅先でふと俳句を詠んでみる。芭蕉の頃から俳句の基本は写生です。旅に出て見た事聞いた事をそのまま素直に文字にする。その基本が大切だと思います。日出彦さんの句はその典型的なものだと思います。

春雨や傘とりどりのシャンゼリゼ

いいですね、春雨とシャンゼリゼの取り合わせがすごく良いと思います。春雨やでいったん切っている事で句に広がりも出ています。



マロニエの花咲き競うセーヌ土手

* マロニエの花咲き競ふセーヌかな 最後をくかな。で止めた方が句に余韻が残ります。

篠島の頂きぐるり豆の咲く

この句もとても良いです。中七が面白いですね。

菜の花で道を教える農婦かな

* 菜の花で道案内の農婦かな

健さんはめきめきと腕を上げていらっしやいます。今回は二句だけですが、どちらも完成度の高い句だと思います。

夏つばめ鎌倉街道まつしぐら

初夏の鎌倉街道の様子がつばめの飛行によってくつきりと現れています。良い句ですね。

特価本高く積まれし薄暑かな

初夏の街の古本屋さんでしょうか？

少し汗ばむ頃の気候が、関係のない特価本の積まれた店先で、より鮮明にわかってくるのは不思議です。

俳句は思った事をそのまま素直に…が原則、難しくはありません。ぜひ皆さんも投句して下さい。

次号は「金魚 風鈴 その他夏雑詠」です。投句お待ちしております。

母の日や過去より近く母とゐる

チョコレートぽんと頬張り夕焼くる ゆうこ

